

私と私でない誰か

大村伸一

ある日見知らぬ男から道端で声をかけられた。

「失礼ですが、あなたは私ではありませんか」

「いいえ、違うようです」

そう答えると帰っていったが、私の答を信じたわけではないらしく、その後もその男に付きまとわれた。あのとき違いますと断言すればよかったのだ。

そのあと初めて彼に会ったのは、今は存在しないある喫茶店だった。男は私の向かい側の席に座ってテーブルの上に置いた本を読んでいた。本に夢中で私に少しも興味などないようだったが、こちらの様子を伺っているのは、たまに合う視線で分かった。そのときはまだあの質問をした男だとは気づいていなかった。それから幾度かその喫茶店で見かけ、顔見知りになっていたと思うが挨拶をすることはなかった。男はあるときは本を読み、ある時は熱心にノートに何かを書き続けていた。いつも一人で、マグカップのコーヒーは空になることがないようだった。

その日、男は大きな紙に絵を描いていた。帰り際にテーブルの横を通ろうとしてふと見ると、その絵は私の似顔絵だった。絵は上手だったが何か不愉快な気分になり、どうして私の絵を書くのだと尋ねた。男はぼんやりとした表情でしばらく質問の意味が判らないようだったが、やがてこれは自分の顔ですと答えた。そう言われて見直すと、その絵は確かに私ではなく男の顔だった。間違いを詫びてその場を去ったけれど、あとで考えてみるとあれはトリックだったのだろう。最初に見た私の似顔絵を、私はとてもはっきりと憶えていたからだ。バスの時間を確かめるためにみる時刻表や、仕事の合間に窓から遠くの無重力山を見ているとき、あるいは星ひとつない夜空に、ふいにあの似顔絵がくっきりと浮かび上がる。似顔絵を見ていなければ、似顔絵でなく自分の顔を思い出しているだけだとも考えられただろう。しかし、それを見ていた私には似顔絵なのか自分の顔の記憶なのかは間違いようがなかった。

しばらくして、今はもうなくなったその喫茶店でまた絵を描いている男を見かけたとき、私は少し迷ったあと男の席に行って話しかけた。

「絵がお上手ですね」

男は突然話しかけられたことに驚く様子もなく答えた。

「私は絵を描いたことはありません」

確かにその時男がスケッチブックに書いていたのは絵ではなかった。細かくてくねくねと曲

がった線は何かの文字のように見えた。

「それは絵ではないのですね。でも、以前、自画像を描いていませんか」

男が以前あの男と同じ人物であるのかどうか、心もとなくなってきたがそう聞いてみた。

「それはきっと私ではありません。私が私であったことがないように、私でないものがいつも私なのです」

誤魔化そうとしていたのだろう。男は早口でそう言うと、テーブルの上のノートや筆記用具を鞆に放り込んで席を立った。ノートに書いていた文字がテーブルの上にはっきりと写っていたので、男の筆圧はとて強くペン先は特に硬いものを使っているのだと分かった。テーブルに残された痕跡を見るとそれは文字などではなく、細い線と記号で描かれた地図だった。男は何かを隠そうとしていたのだろう。

「忘れ物です」と声をかけると「差し上げます」と言葉を残し男は喫茶店の扉を抜けて行った。その先にあるのは廃棄された地下鉄の駅だけだと私は知っていた。証拠とするためテーブルの地図を写し取るのに二時間かかった。写した後でその地図がテーブルにはじめから描かれていた装飾だったのではないかと思った。その時、男が廃棄された地下鉄の駅から戻ってきて店の前を反対の方向に通り過ぎて行った。私は男の後をつけることにした。

男は幾つものビルの中を抜け港の波の音の近くを通り、やがて公園にたどり着いた。廃棄された地下鉄の駅で着替えたのだろう、漆黑の上着とズボンを着ているので、建物や高架の陰に入ると見失いそうになった。見失わなかったのは、テーブルから書き写した地図の公園に印がついていたからだった。すると地図はテーブルにもともとあった装飾などではなかったのかもしれない。

公園にはベンチと噴水しかなく黒い服で影になりすまそうとしていた男はかえって誰からも隠れられなかった。だとすると男には影になろうなどという計画はなかったのだろう。公園には小さな娘を連れピンク色のワンピースを着た母親ベンチにこしかけていた。噴水の向かい側のベンチでは年老いた夫婦が座り噴水ごしに少女を見て微笑んでいた。犬のリードを牽いた少年が犬に引かれて走ってきて、噴水の横でようやく立ち止まった。公園でそれらの人々は皆、手のひらに何かを隠してそれを時々見つめていた。小さな少女の手は物を隠すには小さすぎるようにも思えたが、上手に他からは分からないようにしていた。男は彼らがちょうど手のひらを覗き込む時に手の動きに合わせて話しかけていた。何を話しているのかは分からなかったが、男が相手の手のひらの中の物を手に入れようとしきりに交渉しているらしいのは分かった。私も近くにいた作業服の青年に近づき手のひらを覗いて、そこに何かがあるのか確かめようとした。青年は機械の内側に堆積する悪臭を分解するための薬品の、純粋な水が濃縮されたような匂いを作業服から漂わせていた。それでは異性に興味を持たれることもないだろう。

「新しい水を使ってみなさい」

思わずそう忠告すると、青年は私の突然の声に驚き手を開いて顔を隠そうとしたので手の中が見えた。青年の手のひらは鏡になっていて噴水やベンチや青年の制服や私の顔が映っていた。鏡の表面に何かに擦れた傷のように生命線運命線知能線が走り、私の顔はそのどの線とも交わっていなかった。

「きれいな鏡ですね」

なにも言わずに手のひらの中を見るのは何か悪いことをしているように思えたので、そう話しかけた。青年は少し頬を赤くして何も答えてはくれなかった。なにか勘違いしていたのかもしれない。私は青年の手を取ると手の中の鏡に自分の顔を近づけた。そうすればせめて生命線くらいは手に入るかもしれない。

「鏡はみんな同じです」

青年は手を握りしめ鏡を見せないようにしてそう言った。

「公園では誰もが手のひらに鏡を隠しているのです。青空や見知らぬ恋人たちの抱擁や犬の残した糞の乾いてゆく様子を、公園の管理者に知られぬように観察するために、誰もが手のひらに鏡を隠しているのです」

それはきっと真実だったのだろう。しかし、私は信じたわけではなかった。

「あの黒い服の男が管理者です。気をつけなさい」

そう言うと、誰彼となく話しかけていたあの男に目をやってから青年は答えた。

「そうだと思った」

噴水のあたりにいた男も青年の視線に気づき、近くにやってきた。

「君の鏡に曇りはないか。もしあれば、私が磨こう」

男はそれまで話をしてきた人々から手に入れた鏡で服のポケットを膨らませていた。おそらく、今のようなことを言い騙して鏡を取り上げてきたのだ。私は青年に目配せして、騙されないようにと注意した。男はそれに気づいていたようで、青年から視線を逸らさず、私に話しかけた。

「邪魔をしないでくれ」

膨れたポケットから鏡がこぼれて地面に落ちた。下が砂地だったので鏡は割れず半分が砂に埋まって残りの半分は公園を写していた。その鏡の中の公園が像でなく絵画のように見えたので拾い上げると、鏡を覗き込んでいる顔は、あの黒服の男だった。それも男が描いた絵だったのだろう。生命線も運命線も知能線すらない鏡など、世界のどこにもありはしない。その鏡を私の手から奪い取り、男は鏡に写っているもの確かめるように一瞥してから、自分のポケットに押し込んだ。

「磨かせてくれ」

そう言うと男は青年の手を当たり前のように掴み、手の中の鏡を奪った。青年には抵抗する隙もなかった。男は青年の鏡に息を吹きかけ服の袖口で拭くと覗き込み、丹念に改めた。

「やはりな」

男は何かを確信した表情で青年と私を順番に見た。それから、地面にその鏡を置くとその横にポケットの中の鏡を並べた。

「見たまえ。この公園ではすべての鏡が同じものを映し出している。つまり、私だ。すると、それから導き出される論理的な結論は一つしかない。この公園にいる者はすべて私なのだ」
確かに作業服の青年やもともと公園にいた母娘、年老いた夫婦、犬を散歩させている少年の誰もが今や男と同じ顔をして、それぞれの場所にいながらこの話をしている男と同じ身振りで誰もいない空間に向かって公園が自分であることを力説していた。しかし公園にいる私はこの男ではなかった。男が自分の主張を訴える相手は私しかいなかった。

「私はあなたではありませんよ」

具体的な理由を幾つも上げてそう反論してみたが、男は聞いていないようだった。地面の鏡を改めて覗いて見ると、どの鏡にも映っていたのは男ではなく私だった。よく見れば男の顔は私の顔だった。私はそれまで感じていた不安がすっかり消えてしまった。では、男に真実を教えよう。少し婉曲に私は尋ねた。

「失礼ですが、あなたは私ではありませんか」